

## 13. 舌根部甲状腺の3症例

○南川 義章 荒井 六郎 越智 宏暢  
玉木 正男

(大阪市大・放)

異所性甲状腺としては、発生頻度の高い舌根部甲状腺を3例経験したので供覧する。

症例1：6歳♀ 主訴は発育不良。甲状腺機能は低下し骨年齢も遅延を認む。

症例2：4歳♀ 主訴は頸部腫瘤による異和感。甲状腺機能は正常に保たれ智能障害・発育障害は認めず。

症例3：33歳♀ 主訴は頸部腫瘤による異和感。症例1, 2とは異なり最初に Tc-pertechnetate で顎下腺腫瘍と診断、摘除標本で異所性甲状腺とわかったもので、手術後<sup>131</sup>I-甲状腺シンチグラフィにて舌根部甲状腺と診断した症例。甲状腺機能低下を認む。

以上3例は全て固有位置にシンチグラム上甲状腺は認めず、舌根部又は舌根部を舌下部にRIの集積を認めた症例で、うち2例は明らかに甲状腺機能の低下を認めるが、現在まで多々報告のある Cretinism と診断出来る症例は認めなかった。甲状腺検査として Tc-pertechnetate を用いられる方向にあるが、舌部甲状腺の検査、発見には付近に Tc-pertechnetate を摂取する組織が多い為、固有位置の甲状腺の場合と異なって困難或は不可能に近く、<sup>131</sup>Iの方が適していると考えられた。

## 14. TSH の Receptor Assay に関する基礎的研究

○間嶋 崇哉 高橋 伯夫 八谷 孝  
宮崎 忠芳 貝増 勲彦 越智 幸男  
(京都府立医大・2内)

今回我々は、TSH の Receptor Assay に関し基礎的検討を加えたので報告する。我々は Hunter-Greenwood 法で標識した。<sup>125</sup>I-TSH は生物

学的活性を失うため、<sup>125</sup>I-TSH と Plasma Membrane の方法では Receptor Assay はできないと考え、標識しないままの生物活性を有する TSH を用いる方法を考案した。即ち蛋白量1mg/0.1ml の P.M に TSH を結合させた後に、これに <sup>125</sup>I ラベルウサギ抗 TSH 抗体を結合させる方法である。抗 TSH 抗体は DEAE-Cellulose にて IgG 分画を得た。crude 抗 TSH 抗体と、更にこの IgG を Sepharose 4B-TSH にて Affinity Chromatography を行い、抗 TSH 抗体を精製した purify TSH 抗体について検討した。甲状腺 P.M と Bovein TSH 10mU とにより、Bound %は BTSH 0 の時に比較し増加した。又この結合は NHSやBSA等の carrier protein の存在により、幾分低下した。次に BTSH 量と B%との関係を比較すると TSH 10mU 添加で結合は増加し、20mU 以上の添加ではそれ以上は B%は増加しなかった。更に purify TSH 抗体では、B%が crude TSH の時に比較し、かえって低下し又 cold BTSH の添加によっても B%は増加しなかった。この事は Affinity Chromatography 中に抗 TSH 抗体が失活してしまったためと考えられた。

以上より抗 TSH 抗体を完全に精製する事及び Receptor 分画を精製する事によって、標識抗 TSH 抗体を用いる方法により、TSH の Receptor Assay が可能であるとの結論に達した。

## 15. 血中 Thyrocalcitonin 測定の基礎的研究

○森田 陸司 山本 逸雄 森 徹  
鳥塚 莞爾

(京大・放)

合成ヒト Calcitonin M (Ciba) 及びその抗血清 (Ciba) を用いて、ヒト Calcitonin の radio-immunoassay の基礎的検討を行った。

Huntor 及び Greenwood 法にて Calcitonin M を <sup>125</sup>I で標識し、ゲル濾過法により精製を行った。倍々希釈の抗血清列で抗血清希釈曲線を作製